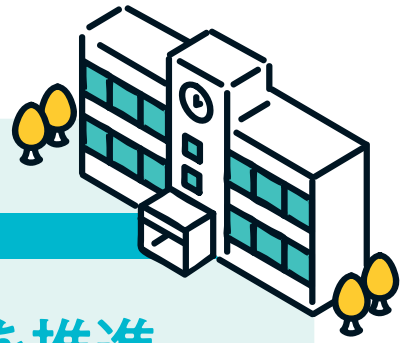




先進校に学ぶキャリア教育の実践

探究とDXを軸に教育改革を推進 自ら問いをもち学ぶ意欲と思考力を育む

純真高校(福岡・私立)

探究と教育DXを軸とし、総合的な探究の時間をはじめ各教科の授業でも何のために学ぶのかを大切にする教育改革に取り組んでいる純真高校。苦手に挑戦する生徒や、避けてきた勉強に向き合う生徒の姿がうかがえます。

こんな学校は必読！

- ✓ 生徒に何のために学ぶのか理由を見つけてほしい
- ✓ 探究活動では「問いの設定」に課題感がある
- ✓ デジタル時代に活かせる力を育みたい

取材・文／藤崎雅子

知識詰め込み型から

「なぜ学ぶ」を大切にする教育へ

建学の精神に基づき、現代社会を生きていくための生涯スキルとして「協働」「自己探究」「貢献」の育成を掲げる純真高校(図1)。「医学博士を学園祖とする学校として、長年、看護科を大きな特色としてきた。」

しかし、近年は看護科・普通科共に生徒募集が厳しい状況が続き、看護科の募集停止が避けられなくなった。「少子化が進むなかでも選ばれ続ける学校であるには、新たな特色を打ち出すことが急務」と的野陽副校長。2023年度から抜本的な教育改革に取り組み始めた。

同校に合う教育改革とはどのようなものか。生徒の実態を踏まえて見いだした軸の一つが「探究」だったという。

「従来の知識詰め込み型教育は、学びたいという意欲があっても成立するものです。本校には中学校段階までにその意欲をもてなかった生徒も少なくなく、そこに知識を詰め込もうとしても苦痛でしかありません。まず、なぜ知識が必要なのか、自分がどうなりたいから学ぶのか、自分の頭で考えて自分の言葉で表現できるようにすることが大事です。そのためには、自ら問いを立てて考える探究のアプローチが有効だと考えました」

もう一つの軸は「教育DX(デジタルトランスフォーメーション)」だ。単なるICT教育の導入ではなく、デジタル技術を活用して学習環境や教育手法を大きく進化させることを目指している。

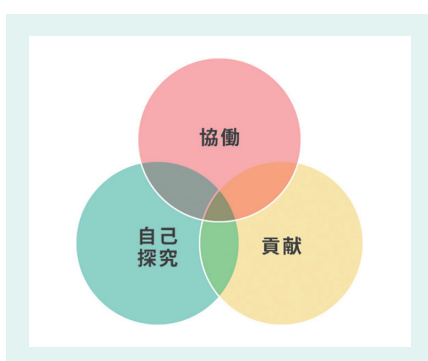
「デジタル技術は少子化や労働力不足などの課題を解決するための重要なソリューションであり、その理解や活用はどの分野においても必要です。また、偏差値では測れないデジタルスキルを身につけることで、新たな可能性が拓かれる生徒も多いのではないかと考えました」(野副校長)

文部科学省「高等学校DX加速化推進事業(DXハイスクール)」を活用し、ICT・探究・発信の拠点としての設備の充実を図り、久留米工業大学とは連携協定を締結した。また、外部人材を教育コーディネーターとして招聘し、教育活動に意見や助言をもらう地域コンソーシアムを立ち上げるなどの外部連携を推進し、目指す教育実践のための環境を整備した。

まずは1クラスの総探から 新たな実践をスタート

探究と教育DXを軸とした新しい教育実践は、24年度に1クラスで小さく始めた。実践の枠組みを少しずつ広げ、数年計画

図1 育てたい3つの生涯スキル





School Data

1898年設立／
普通科・看護科(2024年度募集停止)
生徒数649人(男子330人・女子319人)
進路状況(2025年3月卒業生)
大学82人・短大12人・専門学校62人・高校看護専攻科
28人・就職8人・その他14人

Outline

建学の精神「気品」「知性」「奉仕」を基に、育てたい
生涯スキルとして「協働」「自己探究」「貢献」を設定。
探究学習と教育DXを軸とする教育改革を推進。
2025年度普通科にキャリア探究コースを開設。26
年度共創科を開設予定(認可申請中)、27年度情報
技術コース(仮称)開設を検討。文部科学省 令和6
年度・7年度 高等学校DX加速化推進事業(DXハイ
スクール)に採択。



2学年探究クラス担任
太田 佑平先生



共創科設立準備室長
宗 新悟先生



副校長
的野 陽さん



高性能PCや大型モニ
ターなどを備えた教室に
て実施する、久留米工
業大学との連携授業。

で新学科・コース設立を目指している。そ
の計画の途中段階ではあるが、現在まで
の流れはこうだ。

従来の普通科には特進・進学・普通の3
コースがあった。昨年度、1年生の普通コー
スのうち1クラスを「探究クラス」とし、総
合的な探究の時間で新しいプログラムを
始めた。フィールドワークや哲学対話、地域
課題の解決策を探索するゲーム形式の教材の
活用、久留米工業大学と連携したAーワ
ークシヨップなど、デジタル社会を踏まえ
て探究していくための土台をつくる活動だ
(図2)。その実践を基に、今年度、キャリ
ア探究コースを立ち上げ、独自のカリキュ
ラムを展開している。

哲学対話やアプリ開発に 取り組む4つの探究科目

その新しいカリキュラムの中核となるの
が、探究とDXを融合した4つの探究科目
だ。今年度よりキャリア探究コースと特進
コースを対象に順次開講していく(図3)。
まず、1学年では、探究の土台となる思
考の型を身につけるための「探究基礎」を
設置。『スタディサプリ探究講座』も活用し
て探究プロセスをひととおり学習するが、
特に問いの設定に重点を置き、デジタルと
アナログの両面からアプローチしている。
デジタル面では、生成AIのプロンプト
エンジニアリングを活用し、実際にAIに
質問を行う。問い方によってAIの反応が
どう変わるのかを体験しながら、問いの質
を高める方法を学ぶ。

一方のアナログ面では、自ら問いをもつ

図2 探究クラスの総合的な探究の時間プログラム(2024年度)

PROGRAM	CONTENT	GOAL	RESULTS
安全教育 × フィールドワーク	学校の外に出て、 現地で問いを立て、 検証し、プレゼン	探究・プレゼン の基礎を学ぶ	(1)問いを立てる方法を理解する (2)プレゼンの基本を理解 (3)脱「調べ」学習
哲学対話	論理的な問いのデ ザインを学ぶ	論理的な思考 デザインを学ぶ	(1)論理的思考力が身につく (2)それを表現できる (3)グループワークの基礎を学ぶ
THINKBASE	オンライン教材(企 業経営型ゲーム等) を利用して、探究を より広義の社会的 な課題にまで発展	ケーススタディ で社会的な課 題を解決する	(1)社会的課題の解決能力 (2)キャリア教育的視点が身につく (3)知識を社会に還元する (4)大学受験に活用する方法がわかる
AI・ データサイエンス @久留米工業 大学	夏期キャン プ AIとデータサイエ ンスについて学ぶ	これまで学習し た知識やスキル を実際にAIや データ処理をし て、実社会で使 えるスキルにし て、探究とDXを 結び付ける	(1)探究とDXの実践力がつく (2)データサイエンスを実践的に理解できる (3)体験により、既存の知識やスキルが腑 に落ちる
	ワークシ ョップ AIとデータサイエ ンスを探究と結びつ ける		
成果発表会			
課外授業: ビジネス プランコンテスト	高校コーディネー ターによる講座	コンテスト入賞	(1)緊張感のある本番の経験値 (2)インプットの必要性の理解 (3)言語化の訓練 (4)学校ブランド価値の向上

姿勢や習慣を育むために哲学対話を組み
込んだ。昨年度の探究クラスで数回実施
したところ生徒が非常に生き生きと活動
していたことから、今年度の「探究基礎」
では年間約20回に拡大。哲学プラクティ
シヨナーである常勤講師の進行の下、発
言者の印であり、つながりを象徴する「コ
ミュニティボール」を、対話しながらみな
で作ったり、校内を散歩しながら哲学
者の言葉の意味について対話したり、テー
マや手法を変えながら行っている(図4)。
「探究基礎」科目責任者の宗 新悟先生は

こう話す。
「与えられたテーマについて、浮かんた答え
をおしやべりし合い、さらにそこから新たな
問いを紡ぎ出していきます。正しい答えを
見つけるのではなく、否定されない安心が
できる空間で、お互いの意見を聞き合い、
考えを深めたり、新しい視点を手に入れ
ることが重要です。最初は発言が少な
い生徒もありますが、グループの人数や分け
方を工夫するなどし、幅広い生徒の自己
開示のきっかけになればと考えています」
2・3学年の「情報探究」では、久留米工

図3 4つの探究科目

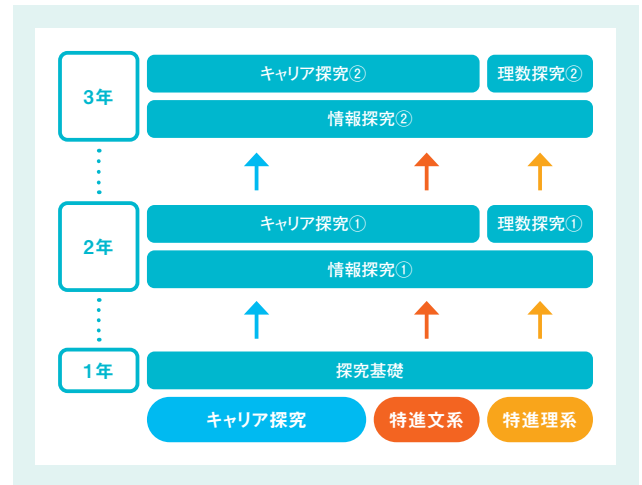
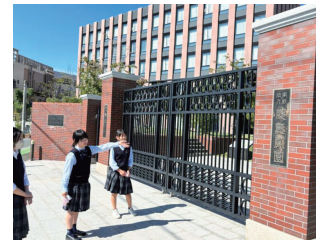


図4 哲学対話の取組例「哲学ウォーク」

- 1 哲学者の言葉が書かれた紙をそれぞれ一人一枚持って歩く。
- 2 「この言葉にふさわしい場所だ」と思ったら立ち止まり、哲学者の言葉にふさわしい場所だと思った理由を発表。
- 3 それを聞いた周りのメンバーは、それに対し一人一つずつ質問する。
- 4 質問された人は、一番考えたいと思った質問の一つを決め、歩きながらじっくり答えやその理由を考える。
- 5 全員の哲学ウォークが終わったら、質問への答えやその理由を発表する。



業大学と連携し、アプリ開発やWebサイト構築などに取り組み。

「情報Ⅱの学習内容を探究するイメージです。ただ、単に教科書の知識・スキルを身につけるのではなく、今後新たに登場するテクノロジーにも対応できる概念や仕組みの理解、そのスキルでどう課題を解決するかという実感値がもてる学習に重点を置いています」（宗先生）

このほかにも2・3学年には、各自の方向性に合わせて取り組むことができる探究科目も設置している。より専門的なプログラミングを学びたい生徒を対象とする「理数探究」では、社会で役立つ業務効率化や分析・予測などのためのプログラミングスキルの習得を目指す。

また、「キャリア探究」では、生徒が株式

会社の設立に取り組み。どんな会社にするかという構想から登記など実務的な手続きまで生徒主体で行う。社会の仕組みについてリサーチをもつて理解し、アントレプレナーシップの醸成を図ることが大きなねらいだ。設立後は学校全体の活動として、多様な生徒がそれぞれの得意を活かして運営する体制をつくっていく計画だ。

問いをもつて考える授業へ個人の取組を共有し拡げる

こうした探究科目にとどまらず、各教科でも探究を意識した授業改善を進めている。

「教科学習で探究を行うことは、特別なことでも新しいことでもありません。漢字が示すとおり、学問には問いがあるものです。

知識にアクセスしやすくなった現代は、その側面の重要性が増していると思います。日常的な授業で、小さな問いをすくい上げて一緒に考えていくことを大切にしている実践が、少しずつ増えています」（宗先生）

例えば、先日の「生物基礎」の授業では、教室内で講義と問い立てを行ったあと、その問いを確認するために学園敷地内でフィールドワークを実施した。英語科では、教科書に登場した話題に関連し、音読練習で発展途上国を支援するNPOの活動を紹介、参加するかどうかの話し合いを通じて学ぶ意味を考える機会とした。また、数学科では、例題の理解をもう一段深めたいとき、生徒がオリジナル問題を作り先生役になって数分間の授業を行うという取組を行っている。

数学科の太田佑平先生は、そうした新しい取組を行った際、授業レポートを作成して校内の教員グループチャットで共有している。それをきっかけにはかの教員から「やつてみてどうでしたか？」「私も取り入れたので教えてください」と声がかかるなど、情報交換が活発になっているという。「ゼロから新しいことを始めるには大変なエネルギーが必要です。事例を蓄積していくことで、それを踏まえた新たな挑戦がたくさん生まれ、学校全体として進化していけたらと考えています」（太田先生）

学校Webサイト改変も生徒の探究の機会に

課外においても、探究と教育DXに関連したユニークな取組が増えている。

例えば、昨年度、同校のWebサイトのリニューアルを目指し、有志生徒と制作会社の協働プロジェクトが立ち上がった。生徒は制作会社からWebデザインに必要な思考方法を学びながら、アイデア出しや写真撮影など幅広く関わり、今春新しいWebサイトを完成させた。

部活動では、「デジタルで学校と運動部の支援をする」というコンセプトのDX部が誕生。部活や授業、学校のイベントを紹介する動画・画像の編集と記事の配信や、運動部のフォーム矯正や定量的なデータ分析等に取り組んでいる。

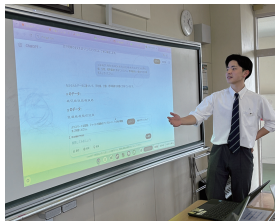
また、希望する生徒には学校外のプロジェクトへの参加を奨励している。昨年度、日本スローフード協会が主催した食の課題解決に取り組むプロジェクトでは、他校の生徒や大人と交流しながら課題解決策を考え、参加生徒の大きな成長が見られたという。

「やりたい」に出会ったときがんばることができるように

昨年度の探究クラスから本格的に動き始めた教育改革に、同校の教員は確かな手応えを感じている。

「生徒のICT活用やプレゼンテーションのスキルの向上にも目を見張るものがあります。それ以上に私が嬉しいのは、自己肯定感の高まりです。以前であれば置き去りになっていた可能性のある生徒も、少しずつ自己開示しながら成長の機会をつかんでいます」（的野副校長）

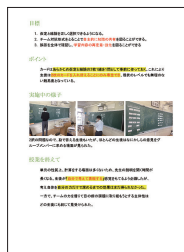
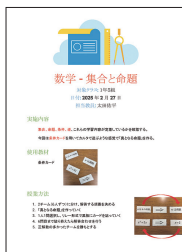
昨年度の探究クラスでこんなエピソード



数学の授業の一場面。生徒が先生役になって自作の問題について解説している。



ある日の「生物基礎」のフィールドワーク型授業。学園敷地内をめぐり、指定された土を採取。



数学の授業レポート。目標、ポイント、実施して感じたことなどを写真を交えてまとめている。

Interview

● 考えることが好きだったので、「探究」という名前に惹かれて探究クラスに入学しました。総合的な探究の時間の中で好きな活動は、哲学対話です。友達の見方や考えを聞いて意外な発見をすることも多く、ものごとをいろんな角度で見ることができるので、とても楽しいです。(2年・普通コース探究クラス 伊崎音子さん)

● 探究クラスのみんなは個性豊かで「濃い」です。私はものごとを一人でさっさと進めるタイプなのですが、プロジェクトでは計画的に分担して行うことが多く、最初は難しいなと思いました。でも、きちんとコミュニケーションしながらやることで、高め合えることに気づきました。(2年・普通コース探究クラス 石川梨乃さん)

● 生徒が学校Webサイトを作るプロジェクトに参加しました。見る側の視点の大切さを制作会社の方から教えていただき、どうしたら中学生に興味をもってもらえるか、どう工夫すると見やすいかなど、みんなで意見を言い合いながら進めました。以前よりいろんな角度でものを見られるようになったと思います。(2年・普通コース 戸田 葵さん)

● 元々動画編集が好きなので、DX部の活動や久留米工業大学の講座などに積極的に取り組んでいます。ほかの学校ではできない貴重な経験なので、きっと将来のプラスになると思いますし、何より自分が楽しいことが一番のやる理由です。将来は、自分なりの工夫でオーダー以上のものを作るエンジニアになりたいです。(2年・特進コース 鎌田悠世さん)

● 小5からプログラミングに興味があり、個人的に取り組んできました。高校では、その方向性を深められるプロジェクトやDX部に参加しています。作る側と見る側の視点の違いや、作品の具体的な良い点を抽象化して自分の作品に活かす方法を学びました。将来はゲームプログラマーになり、ゲームで世の中の人を楽しませることが目標です。(2年・特進コース 竹田慧大さん)

● 高校時代にいろんな経験を積みたいと思い、昨年度、課外で日本スローフード協会のプロジェクトに参加しました。ほかの地域の高校生と一緒に活動したり、農業生産者の方にインタビューしたり、最後はイタリアのスローフード本部とオンラインでつないで活動成果を発表しました。食の知識を学んただけでなく、コミュニケーション力やプレゼン力が身についたと思います。(3年・特進コース 倉橋海姫さん)



「人前に出ること自体に困難を感じるタイプだったので、自宅で相当練習したのだと思います。おそらく入学以来ずっと自分の中には何かに挑戦したいという思いがあったのでしょう。探究クラスという環境の中で挑戦する勇気を育み、元来の素直さでさまざまな刺激を受け止め吸収してきたことがうまく結実した。それがあの発表だったように思います」(太田先生)

探究クラスの実践を進展させ、今年度開設したキャリア探究コースも、順調なス

タートをきった。以前の同校であれば「手のかかる生徒」と認識されていたかもしれない生徒が、教員に付度しない積極的な言動でクラスをリードしている。「そういう生徒の邪魔をしないことが大事」(宗先生)と、それぞれの長所や魅力を発揮できる環境づくりに一層力を入れていく方針だ。

同コースには、スタディサプリなどを活用し、各自の個別課題に合わせて自学を進めるリメディアルの時間を設けている。体験的な活動は得意だが、机に向かう勉強を避けてきた生徒の入学が想定されたからだ。実際、中学時代はあまり勉強しなかったという生徒は多い。しかし、リメディアルの時間には熱心に自学を進める生徒が予想以上に多く、教員を驚かせている。

「さまざまな授業や活動を通じて、自分の思いを言っている、相手が自分の言葉にするのを待とうという環境ができてきて

います。だからこそ、自分のやりたいことが見つかったとき、がんばることができるようではないでしょうか」(的野副校長)

2年前に教育改革を打ち出した当初は、冷やかな反応の教員も少なくなかった。しかし、新たな取組によって多様な生徒がのびのび成長していく姿を目の当たりにし、同校の学びの方向性に自信をもつ教員が増えているという。

「教育改革はとかく一部の推進者だけが見えないブラックボックスになりやすく、それが教職員の心が離れていく大きな要因になります。生徒の姿や手法をオープンに共有しながら、学校全体で推進していきたいと考えています」(的野副校長)

探究コースに置き換えていくという。そして、26年度、教育改革の集大成として、生徒が主体的に学び考えることで解決方法を模索する力を育む新学科「共創科」を開設する予定だ(設置認可申請中)。高校生株式会社運営を探究学習の中心に組み込み、新たな価値を生み出していくマインドを育むという。さらに、次世代を担う人材を育成するための「情報技術コース(仮称)」の27年度設置を目指し、検討も始まった。同校の教育改革は今後も続いていく。

「一人ひとりの生徒が自分の頭で考え、自分の言葉で表現して人に伝えていくことができる。相手の言葉を尊重することでもできる。そういう生徒が一人でも多く育ってほしい。その目的を忘れずに、前例にとらわれない学校づくりを進めていきたいと思っています」(的野副校長)